聖霊降臨後第１４主日（特定１９）　　悔い改めはすべての人に必要　　２０２２．９．１１．

今日の福音書は、ルカの１５章のはじめ、「見失った羊のたとえ」と「失くした銀貨のたとえ」です。そして、そのあとで、今日の日課には入っていませんが、「放蕩息子のたとえ」になるわけです。放蕩息子の話は、イエス様の話されたたとえ話の中でも、特に、ドラマチックなものなのですが、並べて見ると、１５章は、１００匹の中から１匹がいなくなる話、１０枚の中から１枚がなくなる話、そして二人の息子のうちの一人が去ってゆく話として、共通しています。

そして、それぞれのお話の主役は、決して「１匹の羊」でもなければ、「１枚の銀貨」でもないし、三番目は、「放蕩息子のたとえ」というタイトルですが、息子が主役というわけでもありません。

主役は、失ったものを必死で探す持ち主。去っていった者を、気にかけながら、自発的に帰ってくるのをじっと待っている父親です。それは、父なる神様が、わたしたち一人一人に対して、いかに強い愛情を持っておられるか、ということを伝えたいための、一連のたとえ話、ということになろうと思います。

そして、この三つの話に共通する、大切な言葉は「喜び」でしょう。

羊の話では、羊飼いは、羊を見つけたら「喜んでその羊を担いで、」帰ります。そして人々に「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください。」と言います。
銀貨の話では、「無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください。」と言っています。

放蕩息子の話では、父は祝宴を始めるのですが、ふたりの息子のうちの兄の方が、家に入ってこないので、父親が、家から出てきて、兄の方に「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」という言葉で結んでいます。

しかし、私には、この「喜び」という言葉が、登場人物の言葉としてではなく、イエス様ご自身の言葉として、羊の話のしめくくりと、銀貨の話のしめくくりに使われているところが、気にかかりました。

７節の「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」という言葉と、１０節の「言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」
特に、羊の話の方では、「悔い改める一人の罪人」と「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」というふうに、比較していること、しかも「悔い改める必要のない」とはどういうことなのでしょうか。この問題を解くためには、この三つの話を、イエス様は、何故話すことになったのか、考える必要があります。

今日の福音書の、１節と２節には、イエス様が話をされた背景が語られています。
１節「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。」 ２節「すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。」

ここには、イエス様を取り巻く、二つのグループがありました。
一つは、「徴税人や罪人」と呼ばれるグループ。この人たちは、ユダヤ人の社会の中で、救いの範囲から外れている人たち、ということになっていました。この人たちには、ほかに「遊女」や「異邦人」などが入るだろうと思われます。イエス様は、このような人々との関わりを大切にしていたので、その当時のラビと呼ばれるユダヤ教の教師たちの中で、異色な存在でした。

そして、もう一つのグループは、「ファリサイ派や律法学者」と呼ばれる人々で、ユダヤ教の律法を守ることに一生懸命でした。「ファリサイ」とは「分離された者」という意味で、自分たちは、特別に選ばれた、立派な人間だ、と自負している人たちでした。

この「ファリサイ派や律法学者」の人たちは、彼らの目からは「この人たちは救われるはずがない」と思っていた徴税人や罪人たちに、イエス様が、関わっていることが面白くなかった。それは、１４章の所で、イエス様は自分達ファリサイ派の議員の所で食事をしたのに、ここでは、「徴税人や罪人たち」を招いて食事をするわけで、この結果、自分たちが、徴税人たちと同じように扱われたことが、面白くないわけです。

このことは、放蕩息子の兄が、弟のことで不平を言っているのにつながるわけですが、百匹の羊の話では、この人たちは、登場人物の何に当たるのでしょうか。見失った一匹の羊が、「徴税人や罪人たち」にあたることは、容易にわかりますが、ファリサイ派や律法学者が、「残った九十九匹」ということになる、というのが素直な読み方でしょう。

そして、その人たちのことを、「悔い改める必要のない正しい人」という表現で、語られていることに注目する必要があります。「正しい人」というのは、私たちは、何となく「すでに悔い改めたクリスチャン」。どんな時も、イエス様の群れの中にちゃんとつながっている人々を頭に描いてしまいやすいですが、今日のところでは、そんな解釈は間違っている、と私には思えるのです。

今日の福音書と同じような背景から、面白い言葉がマタイによる福音書の９章に出てきます。

◆マタイを弟子にする
9:イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。
10:イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。 11:ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。 12:イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。 13:『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

イエス様がここで、「正しい人」というのは、「自分自身、悔い改める必要がないと考えている者たちのことを言っている」のです。

この人たちは、「週に二回断食したり、沢山の献金をしている。」と大威張りで、自分の払った犠牲のいけにえのことを自慢する人たちです。そのような人たちに「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない。」と批判されています。

今日の詩編５１編は、１０節までしか唱えませんでしたが、この詩編を作ったダビデは、１６節、１７節が言いたかったのではないかと思います。

１６：あなたはいけにえを望まれず　//　燔祭を献げても喜ばれない
１７：神よ、わたしの献げ物は砕かれた心　//　あなたは悔い改める心を見捨てられない
と言っています。

私たちは、聖書の他の箇所（ローマ３：９～）から、義人という「正しい者」はひとりもいなくて、すべての人が悔い改めを必要としていることを知っています。そして、イエス様は、しばしば、自分を正しいと思っている者に、悔い改める必要のない「正しい人」という言葉を使って、実は相手を批判しておられることを知っておく必要があります。

今日の、見失った羊の話で、群れから離れた羊が、徴税人や罪人を表しているように、九十九匹の羊が、悔い改めの必要が全くないと思っているファリサイ派や律法学者を指していることを覚えておきたい。

そして、「過ちを改むるに、はばかることなかれ。」ということわざがあるように、私たちは、自分の生き方を常に反省し、そんな私たちを、いつも気にかけ、探し続け、そして待ち続け、引き返すと、大喜びで迎えてくださる神様がおられることを、今日の、一連のたとえ話から、確信したいと思います。